



**JAPANESE A1 – STANDARD LEVEL – PAPER 1**  
**JAPONAIS A1 – NIVEAU MOYEN – ÉPREUVE 1**  
**JAPONÉS A1 – NIVEL MEDIO – PRUEBA 1**

Tuesday 21 May 2002 (afternoon)  
Mardi 21 mai 2002 (après-midi)  
Martes 21 de mayo de 2002 (tarde)

1 hour 30 minutes / 1 heure 30 minutes / 1 hora 30 minutos

---

**INSTRUCTIONS TO CANDIDATES**

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only. It is not compulsory for you to respond directly to the guiding questions provided. However, you may use them if you wish.

**INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS**

- Ne pas ouvrir cette épreuve avant d'y être autorisé.
- Rédiger un commentaire sur un seul des passages. Le commentaire ne doit pas nécessairement répondre aux questions d'orientation fournies. Vous pouvez toutefois les utiliser si vous le désirez.

**INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS**

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento. No es obligatorio responder directamente a las preguntas que se ofrecen a modo de guía. Sin embargo, puede usarlas si lo desea.

次の1 (a) の文章と (b) の詩のうち、どちらか一つを選んで解説しなさい。(5  
メンタリィを書きなさい。)

1 (a)

枇杷<sup>びわ</sup>を食べていたら、やってきた夫が向かい合わせに座り、俺にもくれ、とめず  
らしく言いました。肉が好きで、果物などを自分から食べたがらない人です。

「俺のはうすく切ってくれ」

さしみのように切るのを待ちかねていて、夫はもどかしげに一切れを口の中に押し  
5 込みました。

「ああ。うまいや」

枇杷の汁がだらだらと指をつたって手首へ流れる。

「枇杷ってこんなにうまいもんだったんだなあ。知らなかった」

一切れずつつまんで口の中に押し込むのに、鎌首<sup>かまづね</sup>を立てたような少し震える指を  
10 四本も使うのです。そして唇をしっかりと閉じたまま、口中で枇杷をもごもごまわし、  
長いことかかって歯ぐきで噛みつくしてから嚥み下しています。歯ぐきで噛むとい  
うことは顔の筋肉を歯のある人より余計上下させなくてはならないので大へんこ  
とです。唇のはしに汁がにじみます。目尻には涙のような汗までたまっていきます。

そうやって一個の枇杷を食べ終ると、タンと舌を鳴らし、赤味の増した歯のない  
15 口を開けて声を立てずに笑いました。

「こういう味のものが、丁度いま食べたかったんだ。それが何だかわからなくて、  
うろうろと落ちつかなかった。枇杷だったなあ」

徹夜をしたあと、いましてがたまで書いていた原稿が上がったところでした。長椅  
20 子に横臥して枇杷の入った鳩尾<sup>つばね</sup>に手を置いて、柔らかい顔つきになって、すぐ眠り  
はじめました。

どうということもない思い出なのに――。丁度食べたかったものを食べていたり  
すると、梅雨晴れの午後のその食卓に私は座っています。

あの手の形は……、父親ゆずりなのだ、言っていました。もの書きの手という  
より、篤実な農夫か、田舎寺の坊様の手なのかもしれない。節が高く短指は、  
25 先がばち形にひらいていました。だから、ものをとり押さえようとすると、ことさ  
らかまえて硬<sup>かた</sup>指になるのです。しがみつくように万年筆を握りしめ、書物を繰ると  
きは、先ず按摩<sup>あんま</sup>のように撫でまわしました。

(中略)

向かい合って食べていた人は、見ることも聴くことも触ることも出来ない「物」  
30 となって消え失せ、私だけ残って食べ続けているのですが――納得がいかず、ふと、  
あたりを見回してしまう。

ひょっとしたらあのとき、枇杷を食べていたのだけれど、あの人の指と手も食べ  
てしまったのかな。――そんな気がしてきます。夫が二個食べ終るまでの間に、私  
は八個食べたのをおぼえています。

(武田百合子『ことばの食卓』作品社)

(注)

武田百合子 (一九二五―一九九三) 随筆家。昭和二六年、小説家・武田泰淳  
と結婚。『犬が屋見た』で読売文学賞、『富士日記』で田村俊子賞を受賞。

― 作者は、夫の枇杷を食べる様子をどのように描いていますか。

― 「ひょっとしたら、あのとき、あの人の指と手も食べてしまったのか」ということには、どのような作者の気持ちが表現されているのでしょうか。

― この文章を読んで、あなたは「食べる」ことについて、どのように考えましたか。

1 (b)

夕映ゆふば

わが窓にとどく夕映は  
 村の十字路とそのほとりの  
 小さい石の祠ほらの上に 一際ひとまはかがやく  
 そしてこのひとときを 其処そこにむれる

5 幼い者らと

白いどくだみの花が  
 明るいひかりの中にある  
 首のとれたあの石像とほとんど同じ背丈の子らの群ぐん  
 きょうもかれらの或る者は

10 地藏ぢざうの足許あしごに野の花をならべ

或る者は形ばかりに刻まれたその肩や手を  
 ついたり擦なったりして避よんでいるのだ  
 めいめいの家族の目から放たれて  
 あそこに行われる日日的にちじつのかわいい祝祭

15 そしてわたしもまた

夕毎ゆふごとにやと活計かちけいからのがれて  
 この夕ゆふべに文字をつづる  
 ねがわくは このわが行いも  
 ああせめては あのような小さい祝祭であれよ

20 仮令かじやうそれが痛みからのものであっても

また悔いと実りのない憧あこがれからの  
 たったひとりのものであったにしても

(伊東静雄『反響』一九四七年)

(注)

伊藤静雄(一九〇六〜一九五三年)詩人。長崎県の生れ。若い頃はドイツ浪漫派、特にリルケの影響を受けたと言われる。詩集に、「わがひとに与ふる哀歌」などがある。

祠 神をまつる社殿。

活計 暮らしを立てるための手だて。生計。

1 この詩の中で、子供達は何をしていますか。詩人はそれをどのように見えていますか。

1 「ああせめてはあのような小さい祝祭であれよ」とありますが、詩人は何を願っているのでしょうか。

1 この詩が「夕映え」という題をもっているのは、なぜでしょうか。

---